



Data

監督: 周防正行

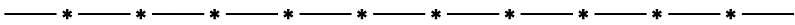
出演: 成田凌 / 黒島結菜 / 永瀬正敏
/ 高良健吾 / 音尾琢真 / 竹中直人 / 渡辺えり / 井上真央 / 小日向文世 / 竹野内豊
/ 山本耕史 / 池松壮亮

👁️👁️ みどころ

活動写真には活弁が付きもの。チャップリンのサイレント映画＝スラップスティック喜劇も面白かったが、日本特有のカツベン付無声映画はもっと面白い！それに楽団が付き、観客の歓声と野次が加われれば、まさに鬼に金棒。これぞ娯楽の神サマだ。そんな周防正行監督作品が、満を持して登場！

ところで、カツベンって一体何？豚カツ弁当？それとも串カツ弁当？そんな無教養な若者には是非「映画検定」を受験して欲しいが、少なくとも本作をその入門編に！

ラストに見る怒濤の活劇を楽しみ、音楽を楽しみ、そしてカツベンのしゃべりをしっかり堪能したい。



■カツベンってナニ？今ドキの若者はわからないかも？■

本作を楽しみにしていた私は公開直後の日曜日に映画館に行ったが、満席を予想していたにもかかわらず、館内はガラガラ。「キネマ旬報12月下旬号」では8頁から31頁にわたって本作の大型特集を組んでいるし、直前の新聞紙評では各紙が大きく取り上げていたのに、これは一体なぜ？その原因の1つは、きっと『カツベン』というタイトル自体が若い世代には全くわからないためだ。つまり、「〇肉〇食」の四文字熟語を求める問題で、「焼肉定食」と回答する今ドキの若者なら、『カツベン』を「豚カツ弁当」とか「串カツ弁当」と理解しても仕方がない。また、私たち法曹界では、従来の「ボス弁」と「イソ弁」の他、ここ10数年で「ノキ弁」という言葉が定着したが、これは法曹界以外には全くわからない言葉だ。

しかして、『カツベン』とは？これは言うまでもなく「活動弁士」のことだが、それがわかって、そもそも「活動弁士」とは一体ナニ？

■□■周防監督の着眼点のすばらしさに敬服！■□■

2006年に株式会社キネマ旬報社とキネマ旬報映画総合研究所が主催する映画検定の3級に合格した私にとって、その公式テキストブックである『映画検定 公式テキストブック』（キネマ旬報映画総合研究所編）は愛読書。2019年11月4日の埼玉にある「SKIPシティ映画ミュージアム」で見た『映画のはじまり ワンダーランド展』の見学では、そんな知識が大いに役立った。

サイレント映画と言えば、『月世界旅行』（1902年）、『國民の創世』（1915年）、『イントレランス』（1916年）等の名作や、チャールズ・チャップリンの『黄金狂時代』（25年）、『街の灯』（31年）、『モダン・タイムス』（36年）等、数々の名作を思い出すが、何と本作のテーマは、「西洋にはサイレント映画の時代があったが、日本には真の意味でのサイレント映画はなかった」ということ。そのココロは、日本には活動弁士がいたということだ。なるほど、なるほど。しかして、本作のパンフレットの巻頭には、周防監督の「映画にまだ音がなかった時代、映画館は活動弁士の声、楽士の演奏する音楽、観客の歓声、かけ声、野次、そして涙と笑いに溢れていた。当時の映画館は、ライブパフォーマンス会場だったのである。」の言葉があるから、その意味をしっかりとらしてみたい。

「映画」という言葉がいつから定着したのかは知らないが、サイレント時代のそれは、映画ではなく活動写真。そして、活動写真には、活動写真をより楽しめるように、楽士の奏でる音楽に合わせ、自らの語りや説明で彩った活動弁士がいた。『シコふんじゃった。』（92年）、『Shall we ダンス？』（96年）、『それでもボクはやってない』（06年）（『シネマ14』74頁）と、日本映画の歴史にその名を刻んできた周防監督は、本作でそんな活動弁士＝「カツベン」に注目！そんな周防監督の着眼点のすばらしさに敬服！

■□■山岡秋聲（＝徳川夢声？）の栄光と苦悩は？■□■

周防監督は本作を、オーディションで採用した成田凌演じる染谷俊太郎と、黒島結葉演じる栗原梅子を主人公とする青春群像劇＝エンタメ作品に仕上げている。したがって、本作導入部では子供時代のこの2人が憧れる活動弁士・山岡秋聲（永瀬正敏）の全盛時代の栄光が描かれるが、サイレント映画からトーキーの時代が変わっていく中で、必然的にその職を失うことになってしまうことになった活動弁士の苦悩はあまりシリアスには分析されていない。もっとも、徳川夢声をモデルにしていると思われる、本作の影の主人公とも言べき山岡は、俊太郎が成年になった中盤以降は「青木館」専属の活動弁士として登場するが、もはや全盛期を過ぎ、ただの飲んだくれオヤジ状態になっているから、その姿に注目！そして、全盛期を過ぎた彼がその時点で抱えている苦悩と、活動写真の今後のあり

方については、彼の「映画はもうそれだけでできあがっているのに、俺たちは勝手な説明をつけてしゃべる。これが実に情けねえ」というセリフの中でハッキリ分析されているので、それにはしっかり注目したい。

チャールズ・チャップリンがサイレント映画にこだわり、トーキー映画を作ろうとしなかったのは、何よりも動きのスピードと面白さで見せる「スラップスティック喜劇」を作り、演じていたからだ。これは日本では「ドタバタ喜劇」と呼ばれるものだが、そこでは動きに最大の重点が置かれ、セリフはあまり重要視されていなかった。しかし、そんなチャップリンも、1940年製作の『チャップリンの独裁者』で、はじめてオールトーキーの映画に方向転換をすることに。そして、同作ラストで、チャップリンが演じた6分間にわたる人類愛を訴える心に染みる大演説が全世界の評判を呼んだのだから、歴史は皮肉、かつ面白い。

■□■ドタバタ劇狙いの脚本が大成功！その理由は？■□■

前述のとおり、サイレント映画全盛期に「スラップスティック喜劇」を引っさげて登場したチャップリンは大成功したが、本作のパンフレットにある、脚本・監督補片島章三の「活動弁士に魅せられて」と題された「STAFF INTERVIEW 01」を読むと、「昭和27年から29年にラジオドラマ『君の名は』が放送された時。あまりの人気で放送時間には銭湯が空になったというエピソードを思い出して・・・。」と語っている。そして、そのエピソードから本作のような活劇を思いついたと解説している。

しかして、本作では、2人の主人公の子供時代のエピソードが終わると、「心を揺さぶる活弁で観客を魅了したい」という夢を抱く俊太郎は今、山岡秋聲のニセ弁士として泥棒一味の片棒を担いでいたからアレ・・・。当時は、娯楽の王様だった活動写真の巡業隊が町にやってくると、町の住民はこぞってその小屋に集まったため、自宅はカラッポに。そうすると、その隙に家に入り込んだ巡業隊の別働隊は盗み放題というシナリオだ。現実そんなアイデアが成功するとは思えないが、映画は何でもありだから、本作前半は次々とそんなシークエンスが登場する。もっとも、そんな活動弁士と窃盗団との持ちつ持たれつの関係が長続きするとは思えなかったが、案の定、熱血刑事・木村忠義（竹野内豊）の追跡の前に、俊太郎は自分だけ金の詰まったトランクを持って逃げるのと引き換えに相棒だった凶悪泥棒の安田虎夫（音尾琢真）を官憲の手に引き渡してしまうことに。そんな俊太郎は、以降官憲のみならず安田からも執拗に狙われることになってしまったが・・・。

■□■懐かしい音楽が大成功！その理由は？■□■

他方、本作がすばらしいエンタメ作品に仕上がっている要因の1つは音楽。私たち団塊世代なら、誰でも運動会の時のテーマ音楽を覚えているはず。また、チンドン屋が町を練り歩く時のテーマ音楽もよく知っているはずだ。ちなみに、私たちは毎月1度愛光関西9

期の囲碁会を開催し、その都度懇親会をしているが、そこで先日話題になったのが「ロバのパン屋」。今ドキそんなものを知っている人はいないだろうが、私の故郷の松山では家の前をロバのパン屋がロバのパン屋のテーマ曲を流しながら通っていた。

本作ラストには、エンディング曲として奥田民生の「カツベン節」が流れるが、まさに、これこれ！本作のパンフレットには「STAFF INTERVIEW 02」として音楽周防義和の「文化と時代が交差した知らない世界へ」があるので、これをしっかり読み込み、音楽と融合させながら本作の活劇を楽しみたい。とりわけ、それはラストに展開される怒濤のクライマックスを含めて本作にいくつも登場するチャップリンの「スラップスティック喜劇」ばりのドタバタ劇のシーンで効果的だから、音楽と活劇の両方をしっかり楽しみたい。

■□■俊太郎の職場は？ライバルは？人物模様は？■□■

文字どおり(?)どっしりした嫁・青木豊子(渡辺えり)の尻に敷かれながら青木館を経営しているのは、青木富夫(竹中直人)。その青木館の活動弁士が山岡の他、茂木貴之(高良健吾)と内藤四郎(森田甘露)だが、この時点で山岡はろくな仕事をせず、ただの飲んだくれオヤジ状態だった。他方、その隣町のライバル館として急成長していたのが、ちょっとヤクザ風の男・橋重蔵(小日向文世)が経営する活動写真小屋。客も人手も次々と橋に引き抜かれている青木館はすでに閑古鳥が鳴いていたが、橋は青木館叩きの手を緩めず、青木館の看板カツベン・茂木の引き抜きを画策していた。もっとも、楽士の定夫(徳井優)、金造(田口浩正)、耕吉(正名僕蔵)の三人組はボンコツ状態ながら結束を固めて頑張っていたし、浜本祐介(成河)もちょっとした「役得」を重ねつつ、プロの映写技師としてしっかりその義務を果たしていたから、茂木さえ残留してくれれば、まだまだ青木館は大丈夫?

そんな町に、ある日流れ着いた俊太郎は、「活動弁士になれるかも?」と考えて青木館の面接(?)を受けたが、就職できたのは雑用係。しかして、本作のパンフレットのストーリー紹介には次のように書かれている。すなわち、

「しかし、そこで待っていたのは、(人使いの荒い館主夫婦)、(酔っぱらいの活動弁士)、(傲慢で自信過剰な活動弁士)、(気難しい職人気質な映写技師)とまさかの曲者オンパレード。そのうえ、泥棒一味から奪った謎の大金をめぐる俊太郎を狙う(凶悪泥棒)、それを追う(熱血刑事)にも目をつけられ追われる羽目に。夢を叶えるどころか人生最大のピンチに!」

なるほど、なるほど。

■□■カツベンの地位は？仁義なき引き抜き合戦は？■□■

『カツベン!』と題された本作では、オーディションで見事に主役の座を射止めた成田

凌のカツベンぶりが最大の見どころになるのは当然。しかし、それと対比しそれを引き立てる上で、永瀬正敏のカツベンぶりと高良健吾のカツベンぶりも大きなポイントになる。とりわけ、「客はシャシンを観に来ていないんじゃない。俺の説明を聞きに来ていたんだ」と語る茂木は自信満々（自信過剰?）のカツベンで、とりわけ「お涙もの」のカツベンをやれば超一流で、女の観客は一斉に黄色い声をあげたり涙を流したらしい。したがって、橋がそんな茂木を引き抜き、看板活弁にすれば、青木館が潰れてしまうことは明白。そこで、その役割を担ったのが自らも茂木の大ファンである橋の娘・琴江（井上真央）だ。

そんな状況下、山岡が酒に酔い潰れ、お仕事放棄状態になった時、「私が代役を果たします」と名乗り出たのが俊太郎。ピンチヒッターながら、いよいよ「カツベン・俊太郎」の本格的デビューだ。素人が急に活弁なんかできるはずがない。青木をはじめ関係者は皆そう思いながら俊太郎の活弁ぶりを見ていたが、何とこれがすごい。こんな掘り出しものがあったとは！その出来に青木も観客もそして栗原梅子（黒島結菜）も大喜びだが、それによって自分の価値が相対的に低下してしまった茂木の気持ちは・・・？また、それまで茂木一筋だった琴江の気持ちは・・・？

他方、子供の頃から活動写真の女優になることを夢見ていた梅子と俊太郎との再会はある意味で当然。だって、活動写真の業界はそんなに広いものではないから、牧野省三監督（山本耕史）や二川文太郎監督（池松壮亮）らも活動写真を見るため、あちこちの小屋に顔を出していたから、その周辺にいる女優のたまごたちと顔を合わせるのもある意味当然・・・。本作中盤では、国定天聲と名乗ってカツベンとしての本格的デビューを果たし、さらに梅子との再会を果たした俊太郎の存在感をかみしめながら、花形カツベンの引き抜き合戦の模様をしっかりと観察したい。

■□■こりゃ面白い！怒濤のドタバタ劇を堪能！■□■

本作は、活弁を目指す若者・俊太郎の奮闘物語であると同時に、お互いに活動写真が大好きだった幼なじみ同士の恋物語。したがって、俊太郎と梅子が再会した後、1度くらいはキスシーンも！そう期待したが、残念ながらそれは登場しないばかりか、俊太郎と琴江のキスシーン（?）が1度だけ登場するので、そんな入り込んだ展開（?）にも注目！

また、『カツベン!』と題された本作は、本来はその芸だけで勝負すべきだが、俊太郎がトランクに入れた大量の札束を隠したままにしていたため、安田との間でその奪い合い合戦が生じるし、木村刑事との追跡合戦も生じてくる。もちろん、俊太郎が無名のままならそれが表面に浮上することはないが、青木館での俊太郎の人氣が沸騰し、国定天聲として有名になってくると・・・。

そんな中、ライバル心をあらわにすると同時にヤクザの凶暴性も露骨に見せ始めたのが橋。「自民党をぶっ壊す」と叫んだ小泉純一郎元総理は、郵政民営化を断行し、官邸機能を強化することによってそれを実現したが、さて橋は「青木館ぶっ潰し作戦」をいかなる手

段で・・・？ちなみに、名作『ニュー・シネマ・パラダイス』（89年）（『シネマ 13』340頁）でも、クエンティン・タランティーノ監督の大ヒット作『イングリシアス・バスターズ』（09年）（『シネマ 23』17頁）でも、映画館が焼失してしまう悲劇がストーリー展開の大きなポイントになっていたが、その原因は「フィルムの可燃性」のため。しかして、『ニュー・シネマ・パラダイス』に再三登場していた映写室がフィルムでいっぱいだったように、青木館の映写技師・浜本の部屋もフィルムでいっぱい。すると、そこに火を投げ込めば一気に……。しかして、10月31日の火災で沖縄の首里城が一夜にして焼失してしまったのと同じように、青木館も一夜で完全に焼失してしまうことに。

すると、大量の札束が詰まったあのトランクも燃えてしまったの？また、火災保険に入っていなかったであろう青木館の再建は？そして、二川監督から女優としての本格的デビューを勧められた梅子の大阪行きの決心は？さらに、木村刑事の執念の捜査の結末は？本作ラストに向けては、そんなこんなのドタバタ劇の楽しさを心ゆくまで楽しみたい。

2019（令和元）年12月20日記